

2011年度 プロジェクト型授業

群馬県信用金庫の現状と課題

担当教員名

山田 真弘

間普 崇

蒔田 真也

参加学生学籍番号・氏名

21011002 阿久澤 萌子

21012166 眞崎 瞳

プロジェクト課題設定の理由やプロジェクト型授業の参加理由について

プロジェクト型授業の存在について知ったのは、2010年にボランティア部の活動で参加したことです。しかし、私は発表のみの参加だったので具体的にプロジェクト型授業とはどんな活動なのか知りませんでした。また、その時の私は詳しく知りたいと思っていませんでした。

そして月日が流れ2011年、私は大学2年生になった。プロジェクト型授業のことなどすっかり忘れ果てていたところに、間普准教授と蒔田講師から「話がしたい」と連絡があり、空き時間にE5教室に呼ばれました。私は疑問と不安を抱きつつドアを開き勧められた席へと座りました。話をしたところ経営・会計コースで金融機関についてプロジェクト型授業を作ることになったことを知りました。

プロジェクトの内容はプロジェクトテーマ「信用金庫の現状と課題」が決まった、ただそれだけで参加メンバーはまだ私以外には決まっていなかったということでした。私は実際に金融機関とはどんな業務があるのか、金利の仕組みはどうなっているのか、銀行と信用金庫は同じなのか等、以前から疑問を抱いていました。また、就職先として金融機関も選択肢に入れていたため興味がありました。そのため、プロジェクト型授業に参加しプロジェクト研究を行いました。

まず、活動内容よりも先にメンバー集めをしなければならない、ということになりました。私はメンバーをどうしようか困っていた時に、金融経済コースの阿久澤萌子さんを思い出しました。阿久澤さんと私は、1年次に銀行で勤務していた相原先生の銀行実務を一緒に履修していました。そのときに、彼女が将来は金融機関志望ということを知ったのです。このことから、すぐ阿久澤さんを探し「是非プロジェクト型授業を一緒にやってくれませんか」と声をかけました。すると彼女は親が信用金庫に勤めていたことがあり、金融機関について関心があったのでと、プロジェクト研究に積極的に参加してくれました。プロジェクト型授業の成立やメンバー集めが遅かったこともあり、メンバーは2人で活動することになりました。

プロジェクト課題設定について

群馬県内信用金庫の現状と今後の課題を探ることや、信用金庫の役割（銀行との違い）を明らかにするため調査や分析を行うことです。調査対象とした群馬県内信用金庫は全部で7社ありました。7社は、しののめ信用金庫・アイオー信用金庫・桐生信用金庫・利根郡信用金庫・館林信用金庫・高崎信用金庫・北群馬信用金庫です。

資料調査・分析について

信用金庫と銀行について、私たちはこの2つの組織が預金・融資など通常業務以外にど

のようなことを行っているのか、どのように違う組織であるのかなど、まったくわからない状態でした。まず、群馬県内信用金庫は、しのめ信用金庫・アイオー信用金庫・桐生信用金庫・利根郡信用金庫・館林信用金庫・高崎信用金庫・北群馬信用金庫の7つあることを知り、また、群馬県内に銀行は群馬銀行、東和銀行ということを知りました。

次に信用金庫と銀行のHPを調べ、ディスクロージャー誌をダウンロードし、各信用金庫・銀行について、業績や総資産額など財務諸表（業務純益・経常利益・当期純利益）について比率を出し、平均をまとめました。

総資産額をみると（図表1）東和銀行1,687,776百万円に対し、アイオー信用金庫9,304百万円と銀行は信用金庫よりもあつまっている金額が倍以上に大きく、信用金庫は規模が小さいことがみてとれます。

図表1

	東和銀行	アイオー信用金庫
総資産（百万）	1,687,776	9,304

また、利益率（図表2）でも、銀行と県内7つの信用金庫平均の業務純利益率・経常利益率・当期純利益率それぞれを比べても、比率は信用金庫平均のほうが小さく、利益が取りにくいことがわかります。

図表2

	群馬銀行	信用金庫7社平均
業務純利益率	0.77	0.29
経常利益率	0.5	0.13
当期純利益率	0.29	0.1

このように、銀行と信用金庫の違いは財務諸表から信用金庫は銀行よりも規模が小さく、資金調達の効率が低いことがわかります。しかし、その分信用金庫は小回りが利き大企業ではなく地域に存在する中小企業を主として支え、地域密着型金融の形をとることが可能であるといえるのではないのでしょうか。

『中小企業のライフサイクルと地域金融機関の役割』という本の中でも「地方銀行などが、信用金庫の主要な顧客層である中小企業との取引に従来以上に攻勢をかけてきている。……貸出金利の水準だけを比較する価格競争に終始することを回避し、地域の中小企業に関する定性的な情報、店舗や渉外役員といった密度の高い顧客チャネルを積極的に活用していく必要がある。」（村本2010：45ページ）とあります。

信用金庫が地域貢献に力を入れる訳には、①知名度が上がる可能性があること、②地域が活性化される可能性が高まることで信用金庫に流れるお金の増加すること、そして、③他の金融機関との差別化をすることです。しかし、デメリットも存在します。どこの信用

金庫も同じ内容の活動になりやすく、独自性に欠けていることです。改善策としては、その信用金庫だけの独自の特徴、他の信用金庫との差別化だと考えられます。以下に、群馬県内信用金庫の地域への取り組みとして実施、参加しているものを7つの信用金庫別に記します。

- ① 館林信用金庫：6月15日「信用金庫の日」に共同事業として献血・募金事業の実施。館林まつり・大泉まつり・板倉まつり・邑楽まつりに役職員が参加。館林市・館林商工会議所と協賛して館林プレミアム付消費券入金業務を行う。「たてしん杯争奪邑楽町少年野球6年生大会」に毎年参加。
- ② 高崎信用金庫：6～9月クールビズ、12～3月ウォームビズの実施。「高崎まつり」へのお神輿での参加。「ぐんま県民マラソン2010」に協賛する。本店内のギャラリーにて、絵画展や書道展などの企画展を入場無料開催。「明るい安全な街づくり」に向けて、安全防犯パトロール。認知症サポーター養成講座に役職員235名参加。
- ③ 北群馬信用金庫：渋川市のへそ祭り、山車まつり、伊香保祭り、草津町の白根神社、中之条祇園祭、伊勢町祇園祭、沼田まつり、榛東村の産業祭、吉岡町のふるさとまつり、中之条町の鳥追い祭に参加。群馬県実業軟式野球大会、天皇賜杯軟式野球等への参加。軟式野球大会参加。店舗周辺の横断歩道で登校児童の交通安全お手伝い。地区の清掃活動に協力。『献血』、『募金』の協力や『ぐんま県民マラソン』のボランティア活動参加。
- ④ しのめ信用金庫：『ぐんま県民マラソン』のボランティア活動参加。NPO法人「富岡製糸場を愛する会」（会員1200名）事務局を務め、毎年富岡製糸場で開催される観桜会、シルクコンサートへ参加。富岡製糸場、店舗周辺および近隣公園などの清掃活動。6～9月クールビズを実施。小中学生の職場体験学習、大学生のインターンシップ受け入れ。
- ⑤ アイオー信用金庫：いせさきまつり、おおた夏まつり、伊勢崎シティマラソン大会への参加・協賛。カーボンオフセットの導入。中央地活性化コンサルティング。献血運動、募金活動、ボランティア清掃、寄付、景気動向調査の実施。
- ⑥ 桐生信用金庫：カーボンオフセット通帳の導入、足尾植樹活動、清掃活動への取り組み。桐生まつり、太田まつり、伊勢崎まつりに毎年参加、桐生市堀マラソン協賛。献血活動。
- ⑦ 利根郡信用金庫：献血活動、清掃活動、地域行事への参加。クールビズ・ウォームビズの実施。「がん」「認知症」へのサポート、啓発活動。

各々の信用金庫では、地域にかかわる祭りの参加や、献血、清掃活動の実施など似た活動が見て取ることができます。この中で特に独自性のある取り組みとして、アイオー信用金庫の「中心地活性化コンサルティング」、館林信用金庫の「プレミアム付き消費券」、しのめ信用金庫の「地域活性化応援資金赤れんがローン」をみつけました。次に、これらについて調べました。

はじめにアイオー信用金庫「中心地活性化コンサルティング（伊勢崎市中心市街地活性化支援）」についてです。

アイオー信用金庫は、伊勢崎市に本店を置く信用金庫です。伊勢崎市では車社会の進展に伴い、郊外型大規模商業施設の進出が相次ぎ、中心市街地はかつての賑わいを失ってい

きました。この状況を打開するため、伊勢崎市中心市街地に唯一本店を構える金融機関としてアイオー信用金庫と信金中央金庫、伊勢崎商工会議所の三者が共同して中心市街地活性化調査事業を行うこととなりました。活動の概要としては「中心市街地活性化コンサルティング報告書」の策定、各種調査や、都市の中心市街地を活性化しにぎわいを取り戻そうとする政策、事業の振興になります。

この事業の成果は「中心市街地活性化コンサルティング報告書」をもって伊勢崎商工会議所への提言を行い、これにより、同商工会議所は事業推進の母体となる「組織」設立の検討が開始されました。同時に、この計画書を伊勢崎市へ提出しています。平成 21 年 12 月の伊勢崎市議会定例会において、「コンサルティング報告書」を参考にして伊勢崎駅周辺総合開発事業を検討したいという伊勢崎市長の発言がありました。

今後の予定・課題としては、信金中央金庫が状況をモニタリングし、伊勢崎商工会議所との連携により、提言内容の実行性を高めることや、伊勢崎市内の有識者や街づくりに関与する各種団体に対して提言内容を周知徹底させることで、本提言書の賛同者を広く募ることがあげられます。アイオー信用金庫ではこのように地域の調査を行い、問題点を見つけ改善していくことで、地域活性化に貢献しているようです。

次に、館林市に本店を置く館林信用金庫の「プレミアム付き消費券」です。消費券の目的としては、市内商店街の消費、経済活性化、地域住民へのサービス向上を促すこと、また、地域全体の活性化、持続的な成長を視野に入れた同時的・一体的な「面」的再生への取り組みがあげられます。(平成 21 年 5 月支給の定額給付金との相乗効果を狙う)

消費券は、館林商工会議所(協力：館林市、館林商店街連合会、館林信用金庫)が発行しており、館林市内 222 店舗の商店・大型店で取り扱われ、加盟登録料は一般店では 2,500 円、大型店では 10,000 円とされています。販売内容としては、1 万円で 1 セット＝消費券 1 万 1 千円。また、プレミアム率 10%として 3,000 セット＝33,000 千円で販売されています。有効期限は平成 21 年 5 月 31 日～同年 10 月 31 日(5 ヶ月間)となっています。

取り扱い加盟店の成果としては、普段地元商店街で買い物をしていない市民の利用増加があげられます。館林信用金庫にとっての成果は消費券の入金による預金口座の活性化などです。

評価としては、平成 15 年 12 月 11,000 千円でスタート後、平成 20 年 12 月に販売額を 22,000 千円に倍増させ、また、昨年 5 月には定額給付金の支給もあり例年 12 月取扱分を前倒し 33,000 千円(プレミアム 3,000 千円)で発売することができました。今後の課題としては、消費券の受入金融機関が館林信用金庫のみであり、事務負担が大きいという問題です。

館林信用金庫のように消費券として金融商品を販売することは、地域住民への積極的な消費活動を呼びかけることとなり、地域住民が自らの地域の活性化を促すことにつながります。

最後に、しののめ信用金庫「地域活性化応援資金赤れんがローン」についてです。こちらについては、しののめ信用金庫に訪問(インタビュー調査)を行ったため、詳細な資料をいただくことができたので少し詳しく記していきます。

しののめ信用金庫の本店所在地である富岡市は、地域重要文化財「富岡製糸場」の世界遺産登録に向けた取り組みを群馬県とともに推進しています。富岡製糸場の世界遺産登録による地域活性化・経済効果を見込んで取り組んでいる事業者に対して、低利かつ無担保

商品として「赤れんがローン」を制作し、積極的に支援しています。

「赤れんがローン」は、無担保、第三者保証人不要で販売しており、金利は年1.9%、融資限度額は3,000万円までとなっています。また、「地域第一主義」、「地域活性化へのこだわり」、「地域事業者のための商品」、観光事業への転業・起業等を支援する赤れんがローンによる地域への資金供給面での貢献などをコンセプトとしています。

成果・効果については、割烹料理店・レストラン・旅館等の店舗改装・厨房設備等に利用され、地域の観光ビジネスへの取り組みの先駆けとなっています。平成19年に赤れんがローンを改装費に利用した老舗料理店では、売上高実績が7.8%上昇し、売上総利益も6.1%同様に増加しています。観光客増加に伴う外部資本の参入もあり、周辺の商店街の様相は徐々に変貌しています。こうした状況を受け、赤れんがローンへの問い合わせが増加するなど、赤れんがローンに対する関心は高まりつつあるようです。

今後の予定・課題としては「赤れんがローン」は目下のところ、融資対象先を富岡市と周辺の事業先に限定していますが、県下の絹生産遺産群も世界遺産登録運動推進の対象になっており、これを踏まえて、融資対象先の地域を、絹産業遺産を有する地域へ拡大していく予定です。また、サービス業への転業・起業を地域活性化促進の中核と位置づけ、赤れんがローンの普及を通じて地域貢献を果たしていくことが課題となっています。赤れんがローンの融資実績は下記（図表3）のようになっています。

図表3

赤れんがローン	件数	実行実績
H19年	13件	89,100,000円
H20年	1件	2,500,000円
H21年	2件	12,000,000円
H22年	4件	20,700,000円

ローンが始まった平成19年に比べ、平成20年には件数1件、融資250万円と共に急激に減少しています。しかし、21年、22年と件数・融資ともに続けて上昇しているためローンの普及が進んでいることが見てとれます。

しののめ信用金庫高崎支店でのインタビューについて

HPでの資料調査だけでは、信用金庫について分からないことがありました。わからないことや知らないことをより詳しく知るため、県内の信用金庫でインタビューを行おうと考えました。そして、12月15日にしののめ信用金庫高崎支店を訪問し、総合企画部の宇留間次長からお話を聞くことができました。インタビューの際には、私どもに丁寧にお答えして下さいましたが、ここではわかりやすいように省略して記します。

しののめ信用金庫での強みを聞いたところ、「愛本位主義を経営理念としてお客様のためにと、全職員が考えていること。合併により、信金の規模が大きくなり営業エリアが広域

化し、情報量も増えたこと。また、営業データベースを用いて徹底した提案型のコンサルティング営業を行い、お客様との距離を近くしていること。」とおっしゃっていました。

どういう取り組みを行ったからですか？と聞いたところ「約 900 人いる役職員一人ひとり意見を取りいれているから。」という回答をいただきました。

地域貢献をどういう考えで行っていますか？と聞いたところ、「地域があるから信用金庫が成り立つという考えのもと、その地域を支えるために産業、経済面における支援を行っている。」という回答だったのでやはり信用金庫が地域を中心に大切に考えていると、あらためて感じました。

赤れんがローンについてしのめ信用金庫様は、他社とは違う独特な赤レンガローンがありますが、いづろ概要を考えられて作られたのですか？という質問には「かんら信用金庫からの引き継ぎ。3年前から。地域を支えるために行っている。」とおっしゃっていました。（しのめ信用金庫は2007年にかんら信用金庫、多野信用金庫、ぐんま信用金庫が合併し発足した。）

世界遺産推進による経済効果を見込んで取り組む様々な事業を積極的に支援されておりますが、その事業はどんなことを行っているのか？と聞いたところ、「業種転換、起業についてのデータ集計は行っておらず、こちらで把握はしていないが、概ね観光者向けのサービスの提供や受け入れ態勢の整備に使用されている。」との回答がいただきました。

経済効果に対する評価、ローンを使用している企業の反応などは？と尋ねると、「赤れんがローンにおける経済効果は限定的なものであるが、富岡製糸場の世界遺産登録の経済効果を期待して新たな取り組みを行う上で、資金面で安心して検討ができる点において一定の評価を得ていると考えている。経済効果自体も区切りが難しいものであり現在調査中のため、はっきりとした経済効果は言えない。」とお答えくださいました。

赤レンガローンの今後の予定は？と聞くと、「富岡市にかぎらず、藤岡市などを含めた絹産業遺産群を世界遺産登録運動推進の対象として広範囲での利用、活性化を目指す。（絹産業遺産群：沼田市・藤岡市・富岡市・安中市・下仁田町・甘楽町・中之条町・六合村）」との回答をいただき、赤れんがローンへの情熱が感じられました。

地域や環境への取り組みについては、環境の取り組みを考える部署は総務部であると教えていただき、電気自動車など環境にやさしい車両を導入しているが、移動手段で使っているのかを尋ねると、「H21年6月天然ガス自動車を桐生支店に1台導入。H23年2月電気自動車「アイ・ミーブ」を前橋本部に1台導入。営業車用として利用（通常、しのめ信用金庫では各支店に4台程度の営業車が必要）。今後も継続的な導入を検討していきたいと考えている。」と回答いただきました。環境への取り組みについて、これからどのようにするのか方向性を質問すると、「カーボンオフセット（通帳を作るときに発生するCO2を、排出する分だけ海外の処理施設に頼んでお金で買ってもらっている。）など、積極的に取り組んでいきたい」とおっしゃっていました。

成果と考察（まとめ）

まず、群馬県内信用金庫現状と課題についてです。信用金庫の現状として信用金庫は地方銀行に対し相対的に貸出金利が1%弱高くなっていると言われていています。そのため他の金融機関に比べて利益を上げることに不利になりやすく、また信用金庫は銀行よりも規模が小さく資金調達も少なくなります。しかし、その分小回りが利き地域を支えることが可能であり、狭く、深く、地域へと溶け込み地域に貢献できることとなります。地域貢献やボランティアは直接的な利益増加には繋がらない。しかし、それを継続していくことにより地域自体を活性化させ、結果間接的には将来の利益に繋がっていると考えられます。

信用金庫の課題としては他の信用金庫より独自性をどれだけ強化できるか、過疎化の進行、市町村の人口増減、市町村合併・再編、信用金庫の合併を背景とした衰退傾向にある地域経済の再生・活性化に貢献することだろうと感じました。

信用金庫は地域貢献を通じてその地域への浸透を図ろうとしていること、また地域の特性を出すことで地域を盛り上げ活性化し信用金庫を利用してもらうこと、各信用金庫は銀行の役割とは異なり、インタビューにあったように地域との関わりを中心に考えていることなどを今回のプロジェクトによって知り学ぶことができました。

私たちは今回のプロジェクト研究で明らかになった信用金庫と地域の関係性を今後、金融機関への就職活動などの際に生かしていきたいと考えます。

年間の行動記録（研究スケジュール）

2011 年

9 月 20 日 プロジェクト成立

10 月 6 日 各信用金庫の財務諸表集計

10 月 14 日 各信用金庫の地域貢献活動のまとめ・中間発表準備

10 月 29、30 日 三松祭 プロジェクト型授業中間発表

12 月 8 日 中間発表の反省・まとめ

12 月 12 日 インタビュー準備

12 月 15 日 3、4 限 しのめ信用金庫高崎支店へインタビュー訪問

12 月 20 日 インタビューのまとめ

2012 年

1 月 17 日 本発表準備

1 月 18 日 学生プロジェクト発表

～2 月 29 日 レポート作成

文献リスト

書籍：氏名・発行年・署名・出版社

中小企業のライフサイクルと地域金融機関の役割〈リレーションシップ・バンキングの理論と「つなぐ力」の実践〉 平成 22 年 村本孜 株式会社近代セールス社

インターネット：管理者・ページタイトル・URL・アクセス年月日

しなのめ信用金庫

<http://www.shinonome-shinkin.jp/>

アイオー信用金庫

<http://www.io-web.jp/>

館林信用金庫

<http://www.shinkin.co.jp/tateshin/>

利根信用金庫

<http://www.toneshin.co.jp/>

桐生信用金庫

<http://www.shinkin.co.jp/kiryu/>

高崎信用金庫

<http://www.shinkin.co.jp/tateshin/>

北群馬信用金庫

<http://www.kitashin-web.co.jp/>

東和銀行

<http://www.kitashin-web.co.jp/>

群馬銀行

<http://www.gunmabank.co.jp/>

担当教員による講評

本プロジェクトは、銀行や信用金庫といった金融機関に興味・関心を持つ学生を対象として実施したものであり、学生が、金融業界全体についての基礎的な知識を習得した上で、個別金融機関の活動内容や特徴を調査することを通じ、金融業についての実践的な知識を得ることを目標としたものである。

本プロジェクトでは、信用金庫に焦点を当てて、まずは業界全体についての基礎的な学習をいくつかの文献を通じて行なった。次に、信用金庫についての基礎的な学習をふまえ、群馬県内の信用金庫を分析対象とした調査・分析を行なった。調査・分析では、財務情報を用いた定量的な分析に加え、財務情報以外の各信用金庫による外部報告情報を用いた定性的な調査・分析を行ない、県内信用金庫の様々な取り組みについての共通性および特徴等を理解することができた。さらに、定量的・定性的な調査・分析に基づいて、実際に信用金庫へのインタビュー調査も行なった。学生は、事前の調査・分析において感じた疑問や感想を信用金庫担当者に率直に質問することで、信用金庫の様々な取り組みの背後にある考え方や狙いを知ることができた。

本プロジェクトの参加学生は2名と少数ではあったが、それぞれの学生が意欲的に学習、調査・分析、インタビュー活動に取り組み、本プロジェクトの目標であった実践的な知識の修得は十分に達成できたと考える。また、プロジェクトに信用金庫へのインタビュー活動を取り入れたことにより、学生の主体性、積極性、コミュニケーション能力といったコンピテンシーも伸長したと考える。